



行き詰まるEUのダブルスタンダード

作家・ドイツ在住 川口マーン恵美

国際法違反にも理由はある？

「我々はウクライナと共にある！」というのが、日本政府も含めて、EU エリート国の首脳たちの合言葉のようになってすでに久しい。

「他国への侵略は国際法違反であり、何があっても許してはならない！」

一方、米国は昨年からベネズエラの船を爆撃していたが、ついに新年、ベネズエラに侵入、大統領を攫ってきた。れっきとした国際法違反だ。だから、現在、EUは「ベネズエラとも共にある！」のかと思ったら、それが全く違うらしい。



アメリカ軍によって拘束されたマドゥロ氏
(2026年1月3日、アメリカ海軍の強襲揚陸艦イオー・ジマ内で撮影)
出所：アメリカ合衆国連邦政府

独メルツ首相いわく、「ベネズエラの件は背景が複雑であり、評価を下すのは時期尚早」えっ？ では、ウクライナの件は複雑ではなかったのか？

米国がベネズエラ政府の転覆を図るのは、麻薬の問題もさることながら、実は、ベネズエラのマドゥロ大統領が中国やロシアと密接な関係を保っていたからだ。それは米国にとっては、みすみす中露にベネズエラの資源を奪われるという経済的損失を意味するだけでなく、安全保障上の脅威である。だからこそ、マドゥロ大統領は失脚しなくてはならなかった。

しかし、それが米国がベネズエラを攻撃する理由となるのなら、ロシアにも理由はある。ソ連崩壊後、ロシアがNATOと交わしたはずの「東

方拡大はない」という約束はとっくの昔に破られていたし、オバマ・バイデン以来の民主党政権は、ウクライナ政権を反ロシアのものにすげ替えるため、10年以上、“クーデター”をも含む、ありとあらゆる工作に励んできた。ゼレンスキー大統領の存在は、いわばその成果の一つだが、ロシアにしてみれば、自国の隣にこの西側の傀儡^{かいらい}大統領の治める国ができてしまうことなど、絶対にあってはならなかったはずだ。

ウクライナの大本営発表

ロシアのウクライナ侵攻前、そもそも何が起っていたのか？

ウクライナ東部地域に住むロシア系住民は2014年のキエフのクーデター以来、ロシア語を奪われ、迫害され、ネオナチの軍事組織によって無差別に攻撃されていた。そこでロシア側はそれら住民の保護のため、民兵(正規軍だと戦争になってしまう)を派遣、ネオナチ政府統合軍との間に8年にわたり戦闘が続いた。すでに1万数千人の死者が出ていたという(金沢星稜大学論集第56巻第1号より)。しかも、さらにその間、EUがウクライナに異常に接近。侵攻前夜には、ロシアにとって最後の緩衝地帯であるウクライナは、今にも欧米の手に落ちそうになっていた。

そこで、とうとうロシアの堪忍袋の緒が切れたというのがロシア通の学者やジャーナリストの唱える説だが、西側の主要メディアはそれを取り上げず、以後4年、「ウクライナは善戦、勝利は間近」というニュースを流し続けた。しかし、当然のことながら、実際に毎日、衛星写